

『賛美の力』 井上隆晶牧師

使徒言行録 16 章 25～34 節、ヨハネによる福音書 6 章 11～21 節

①【真夜中の賛美によって】

使徒言行録 16 章は、パウロの第二回宣教旅行について書かれています。パウロはシラスという弟子を連れて旅をしました。パウロが伝道したのは、今のトルコ～ギリシャの国です。パウロがちょうどフィリピというギリシャの町に行った時のことです。占いの霊に取りつかれていた女奴隷が後ろについて来て「この人たちは神の僕で、皆さんに救いの道を伝えています」と叫びました。こんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて「**キリストの名によって命じる。この女から出ていけ**」という、悪霊はすぐに出て行き、女奴隷は占いができなくなりました。ところが女奴隷の主人たちは金儲けができなくなったのを恨み、彼らを捕らえ、役人に引き渡しました。役人たちは彼らを鞭で打ち、牢屋に放り込んだのです。25 節に「**真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。**」とあります。背中が痛んだでしょうが、彼らは牢屋の中で真夜中に賛美の歌をうたって神に祈ったというのです。牢の中にいたほかの囚人たちは、誰も「うるさい」とか「黙れ」と言わずに、この賛美に聞き入っていました。このことは、賛美とか祈りというのは人の苦しみを癒し、慰めを与えることができるということを教えています。真夜中の賛美ということで、思い出した話があります。一つは長崎で被爆し、二人の幼い子供を残して 41 歳で亡くなった永井隆博士（カトリックの信者）の本の中にあつた記事です。

●「原子爆弾がはじけたとき、この浦上のカトリック信者 1 万人のうち八千人が死んだ。ここには純心と常清の二つの女学校があつた。いずれも女子修道会の経営するところで、校長以下教員はすべて修道女がほとんどすべてであつた。純心の生徒たちは、工場に動員されていたが、燃える火の中で賛美歌をうたいつつ、次々と息絶え、灰になっていった。…常清女学校のほうも同じ最期だつた。…女学校から東のほう二百メートルの川端に真夜中幾人かの合唱するラテン語の賛美歌が続いたり絶えたり聞こえていたそうである。夜が明けてみたら、修道女がひとかたまりになって、冷たくなつていた。」

もう一つは第二次世界大戦の時、アウシュビッツ収容所で、コルベ神父が餓死室に入れられた時、牢屋の中で死ぬまで賛美をうたい続け、祈り、周りの囚人たちを励ましていたという話です。

以前、キャロル・ザックさんのハーブによる癒しの集会に出た時、賛美が病人の痛みを和らげ、心の平安と慰めを与えてくれるという話を聞いたことがあります。修道院では、亡くなるまで、病人の周りですずっと讚美歌が歌われるといひます。もう亡くなられましたが、聖ルカ国際病院の日野原重明先生も「音楽療法」というのをされておりました。彼の本の中でこんなことが書かれています。

●ことばは音楽の翼にのせられて言葉では伝えきれない思いまで、いともたやすく伝え合うことができます。…音楽は痛みをも軽くしてくれます。がんの末期の患者さんが、音楽に包まれることでモルヒネの量を 10 分の一にまで減らすことが出来た例もあります。…薬でも治らなかつた病が、音楽で治るのです。…心とからだを切り離した現代医療はまちがっています。

今も昔もそうですが、牢屋に入れられるときには、持ち物はすべて取り上げられます。パウロもシラスも、コルベ神父も聖書は持っていませんでした。彼らは覚えている歌をうたい、祈ることしかできなかったのです。パウロとシラスが何を賛美したのかは分かりませんが、たぶん詩編だと思います。詩編はもともとパープに合わせて歌うものでした。詩編は、朗読する時もそうですが、聞いているだけでも心が慰められます。また信仰を与え、勇気を与えます。賛美の力は大きなものです。地震が起こって、牢の扉が開いてしまったのに、誰も逃げなかつたのは、囚人たちの心が賛美で満たされ、癒されたからだだと思います。これを通してこの後、看守一家が信仰の道に入ることになるのです。賛美は神が人間にお与えになった、心と魂を癒す治療方法です。神は毎週、教会を通して音楽療法を行い、私たちが癒しておられるのです。

②【感謝の祈りを唱えてから】

「さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」(ヨハネ 6 : 11) 男だけで五千人という人を前にして、五つのパンと二匹の魚では、普通に考えるならば、アンデレがいうように「何の役にも立たない」(9 節) し、フィリポがいうように「足りないでしょう」(7 節) ということになります。しかしこの少年が持っていたわずかな五つのパンと二匹の魚をイエス様は感謝したというのです。私たちだったら、これではあまりにも少ない、とやる気を失います。なぜイエス様は感謝をすることができたのでしょうか。

聖書に「どんなことにも感謝しなさい。」(1 テサロニケ 5 : 18) という有名な言葉があります。いい言葉ですから、クリスチャンでなくても日本人には好まれる言葉だと思います。でもこの後に「キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」という言葉が続いています。キリストにあつてどんなことにも感謝しなさい、という意味です。キリスト抜きで考えるなら、単なる格言になります。この言葉は人間が行える単なる良い業ではないのです。神の目には存在するもので無駄なものは何一つなく、無駄なこともありません。悪や死でさえも神は用いて善を生みだされます。イエス様ご自身が、何の役にも立たないようなもの、足りない私たちを用いて、神の業に変えることが出来るから感謝なのです。

聖書に「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、私たちは知っています。」(ローマ 8 : 28) とか、「あなたは善なる方、すべてを善とする方。」(詩編 119 : 68) という言葉があります。神は私たちと共に働いてすべてを善とされる方です。だからこそ、

私たちはどんなことでも感謝することができるのです。

●風邪を引くと気力がなくなります。何もする気が起きないのです。しかも、信仰心も湧いてこないのです。それどころか何をしてはどうせ変わらないし、バカバカしいと思えてくるのです。こうなると牧師の仕事というのは辛いものです。でも、ふと思ったのです。自分に信仰がなく、気力がなくても、この私を選んだのはイエス様なのです。信仰の創始者は私ではなく、イエス様なのです。私が始めたのなら、歯を食いしばって私が頑張らなければなりません、イエス様が始められたのなら、イエス様がこんな私にまた何かを始められるだろう。それまで待とう。落ちる所まで落ちても、そこで待っている者こそ本物だろう、キリストが何をなさるのか待ってみようと思えたのです。

神はどんな時にも働いておられます。神は私が信仰がない時も、働いておられるし、寝ている時もその業を進めておられます。いやむしろ、そっちの方が大きいのです。夜昼寝起きしている内に種は芽を出すのです。人間の業が終わった時、神の業は輝き出します。私たちの上に行われる神の働きというものを信じて、自分の不信仰も、無力さも、小ささもすべて任せましょう。栄光はキリストに、恥は私にです。